
カシオペア・レールウェイ

雪宮鉄馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カシオペア・レールウェイ

【Nコード】

N3176Q

【作者名】

雪宮鉄馬

【あらすじ】

星の海を渡る列車「カシオペア・レールウェイ」。その列車に乗り込んだ少女の、出会いと心の旅をファンタジックに描き出す、中編小説です。

第一話 星くずの絹のハンカチ

赤緯プラス六十度。車窓から見上げる星の海に、Wの形をしたカシオペアが輝いていた。

わたしは、その瞬きに、そつと頬を涙が伝い落ちた。

希望を抱くには、未来の路はあまりにも不透明で、地面を踏みしめて歩き続けるには、現実の路はあまりにもでこぼこしすぎている。その所為で、涙がこぼれたのか、それとも、ただカシオペアが綺麗だったから、涙がこぼれたのか、わたしにはよく分からなかった。

ただ、交わらない理想と現実というものは、なにも広い視野で見つめた先にあるものではなくて、どこにでも平然と転がっているもので、それは、たった十五年の人生しか歩んでいない、わたしの足元にも転がっていた。

きつと、窓辺から見える、宝石のような星の海にもそれは転がっているんだと、わたしは思う。

「涙……何か悲しいことでもあったの？」

わたしと向かい合わせの座席に座る、小さな外国の男の子が心配そうに、わたしの顔を覗き込む。彼のブルーの瞳はとても大きくて、「別に泣いてなんかいない」と嘘を吐くことは出来そうにもなかった。

男の子は、ジーンズのポケットから、小さなハンカチを取り出すと、それをわたしの手に乗せてくれた。車内のランプにかざすと、それはキラキラと輝いて見える、不思議な白いハンカチだった。

「星くずの絹で縫ったハンカチなんだ。お母さんがぼくにくれた最後の形見。どんな涙も吸い取ってくれる、魔法のハンカチだよ。もつとも……アテにならない迷信だけどね」

おどけて笑うブルーの瞳に、わたしはハンカチを受け取って、涙を吸い取った。

「旅は楽しくなくちゃダメなんだ。ほら、観て」

男の子は車窓の外、星の海に輝くカシオペアを指差した。

「もうじき、カシオペアのカフが子午線と重なる。恒星ゼ口時になれば、この列車は次の駅に着く。ぼくはそこで降りなければならぬんだ。だけど、いて座までの長い道のり、お姉ちゃんの旅はまだ続くんだ。だから、旅を楽しんで」

「君は、何故旅をしているの？」

わたしはハンカチを返しながら、男の子に問いかけた。すると、男の子は目を細めて、口許に人差し指を当てる。

「旅の理由は誰にも話しちゃはいけない。それが、カシオペア・レールウェイの決まりなんだ。そうしないと、ぼくたちは列車から降るされてしまう。一度カシオペア・レールウェイを降りたら、もう二度と乗ることは出来なくなっちゃう。目的地へ辿り着けない旅は、旅じゃなくなってしまうんだ」

「そう……残念」

わたしは出来る限りの作り笑顔で答えた。他人の旅の目的に興味があるわけじゃない。ただ、この星の鉄道で乗り合わせた、ちよつとお節介な男の子のことを少しだけ知りたかった。

カシオペア・レールウェイと呼ばれる、星の海を渡る列車に乗り込み、孤独がわたしには一番似合っていると気づいていたのが嘘のように、本当はさびしいのは苦手だと言う矛盾が、わたしの心にあることに気づいてしまったんだ。

男の子は、わたしが心底残念がつているように見えたのか、そつと顔を近づけてきて、小さな声で囁いた。

「はくちょう座にある、トンネルの中なら、旅の理由を話しても大丈夫なんだ」

「どうして？」

「トンネルはブラックホールで出来てる。話した言葉は、車掌さんに届く前に、シュバルツシルトに吸い込まれて消えるんだ」

まるで内緒話でもするかのように、顔を離すと男の子はそばす顔いっぱい笑顔に浮かべた。わたしは、そんな男の子の笑顔を横

目に、車内を見渡した。

レトロという言葉が似合うかのような、木目調の車内には、わたしたち以外の乗客はなく、ただガラスのランプが列車のゆれに合わせ、ゆらゆらとしている。

だけど、不思議なことに、この列車はレールの上を走っていないのだ。静かに、ただ静かに、星のきらめく海を渡っていくのだ。そこがどこなのか、どこへ行くのか、わたしは知らない。

わたしが知っているのは、この列車の名が……。

「この度は、おおぐま座発、はくちょう座経由、いて座行き、銀河鉄道『カシオペア・レールウェイ』をご利用ありがとうございます。次は、うしかい座のアルクトゥールス駅、アルクトゥールス駅。お降りのお客様は忘れ物などないよう、お気をつけください」

車内に設けられたスピーカーから、籠ったような車掌さんの声が聞こえてきて、わたしと男の子はそろって、ドキリとした。しかし、それは、次の駅への到着を知らせるアナウンスで、別に、わたしたちの内緒話を車掌さんが聞いていたわけではなかった。

「行っちゃうんだね」

わたしが男の子に言うと、彼はブルーの瞳でわたしの顔をじっと見てから、前歯の抜けた口をにんまりと弓なりに曲げて、わたしに手を出すように促した。なんだろ？ わたしは少しだけ小首をかしげながら、男の子の前に両手を差し出した。すると、男の子はわたしの名を呼んで、手のひらの上にハンカチを載せた。

「あげる。また涙がこぼれたら、これで拭いて」

「饞別だよ、と笑う男の子に、わたしは戸惑ってしまった。

「これ、お母さんの形見なんですよ？ いいの？」

「うん。アンドロメダのアルフェラッツで降りれば、ぼくにはもう必要ない。だって、お母さんに会えるから」

徐々に窓の外を流れる景色がゆっくりとなり、やがて星の海に浮かぶ、プリズムのような形をした大きくて透明の箱に、列車は入っていく。そこが、アンドロメダ座のアルフェラッツ駅と呼ばれる場

所だった。

「よい旅を」

別れの微笑みとともにそう言って、男の子はくるりとわたしに背をむけると、乗降口が開くのを待って、アルフェラッツ駅に姿を消した。わたしは、ただその後姿を何も言わずに見送った。

男の子を降ろした列車は再び、ゆるやかに揺れながら、プリズムの駅を発車し、星の海へと駆け出す。

「よい旅を……」

わたしは男の子にもらった、星くずの絹で縫われたという、ハンカチを、制服のポケットに仕舞い込んだ。

体中にかかる重力は、誰でも同じはずなのに、わたしの体はとても重い。別に太っているわけじゃない。どちらかと言えば、わたしは背も低いし、やせっぽちな女の子だ。わたしが重く感じるのは、きっと重力や体重なんかじゃなくて、心の問題だった。

高校生になれば、何かが変わると思っていた。何かが変われば、心も軽くなると思っていた。だけど、未来を明るく生き、青春の中を走れ抜けていく同級生たちの姿を見ると、体が強張って、心が重くなっていくことに、何の変わりもなかった。

キラキラしてる未来は、誰の前にも用意されている、なんて、流行情の歌の歌詞にあるけれど、キラキラした未来が、どんなものなのかよく分からない。輝かしい前途と言う言葉は、あまりにも軽はずみで、輝かしい前途を知っている大人にしか言えなくて、少なくとも、わたしみたいなみじめな子どもには、そんな前途は用意されていないんだと思う。

だから、ヒネクレもののわたしの体は重い。

なんで、わたしは重くなってしまったんだろ……。

わたしには友達がいらない。悩みを話したり、ともに喜びをや悲しみを分かち合う友達がいらない。それも原因のひとつかもしれない。人付き合いは得意じゃない。話しかけられても、何を話したらいい

のか分からない。どんな話をしたら、受け入れてもらえるのか分からない。どんな言葉を口にしたら、わたしのことを好きになれるのか分からない。

分からないことだらけで、頭がぐるぐるしてくる。

ぐるぐるした頭で、授業を聞いても、教科書を見つめても、なにも得るものなんてなくて、成績は下がる一方。頭の悪い子、要領の悪い子、根暗な子というレッテルを貼られることは、もうとつくに慣れてしまっている。それなのに、他人からいいように見られたいという願望だけは立派に持っていて、矛盾の中で、わたしはいつも一人ぼっちだった。

親は、そんなわたしに、愛想を尽かして、もうずっと口もきいていない。

わたしは、そんな毎日を、星の見えない夜空を見上げながら、「明日が来なければいいのに」と願いながら生きてきた。なんて詰まらない子なのか、自分でもよく分かっていて。だって、悪いのはわたし。わたしが悪いから、心が重くなって、悪循環を繰り返して、何も変わることが出来ない。

うつん、ちがう。本当は、変わることが怖い、臆病者なんだ。

明日がこなければいいのに……。願いは、星に届くわけもなく、ただ単調に、ただ無意味に毎日は過ぎていき、気が付くと十五歳になっただけ。取り柄もない、友達もいない、詰まらない十五歳になっただけ。

そんなある日、わたしはひとつの逆転的な発想に辿り着いた。その日は、学校に行く前から気分が悪かった。胸とお腹の中間の辺りが、下に引っ張られたみたいに重たくて、誰にも気づかれることなく、ずっと青い顔をしていた。朝ごはんを食べない所為かな、って思ったけど、どうやら違うみたい。学校へ行きたくないと、心が言っている。

毎朝変わらない駅のプラットホーム。灰色のスーツに身を包んだ会社員の人们、黒い鞆を背負った大学生たちが電車を待つホー

ムのベンチで、わたしは一人苦しんでいた。発着時刻を知らせる電光掲示板を見つめながら。そうして、ふと思いついた。明日が来なくなる方法を。

何で思いついたのかはよく分からない。分からないことにも、もう慣れっこだ。

わたしは、鞆をベンチに置いたまま立ち上がり、フラフラとした足取りで、通勤の会社員や大学生たちをかき分けて、ホームの淵に立った。誰もわたしのことなんて気にも留めていなかった。

わたしの目の前に丸くて大きな二つの目が光る。

その後、何が起きたのかわたしにもよく分からなかった。ホームの人たちの声も、冷たい風の音も、電線の上に止まったカラスの声も、とりとめもない街のざわめきも、何もかもが消え去った。その代わり、わたしは夜の中に、ぼつんと立っていた。ここは何処だろう？ まだ少し気分の悪い胸元を押さえながら、わたしはあたりを見回してみたのだけど、なにも見えない。

と、その時だった。

『おおぐま座ドゥーベ駅の二番ホームに、列車が入ります。白線の内側にお下がり下さい』

という聞き慣れた、アナウンスが聞こえ、突然わたしの足元を、真っ白な光のラインが走った。それが白線だと気づいたわたしは、こんな暗闇じゃどちらが内側か分からない、と思いながらも、片方に飛びのいた。

やがて、警笛の音を響かせながら、二つのヘッドライトを光らせて、蒸気のともしに、機関車がわたしの目の前に到着する。あつけにとられているわたしの前に、車内から男の人が降りてきた。真っ黒な詰襟と笛を首から下げた、初老の車掌さんだった。

「このたびは、銀河鉄道『カシオペア・レールウェイ』をご利用ありがとうございます。切符を拝見」

と、車掌さんは手を伸ばしてくる。

銀河鉄道って、宮沢賢治の？ いったいこの人は何を言っている

んだろ、と思いながらも、わたしは制服のスカートのポケットを探った。すると、指先に何かがこつんと当たる。取り出してみると、それはオレンジ色の小さな紙切れだった。紙切れは「おおぐま座↓いて座」と書かれた、銀河鉄道の切符だった。

こんなもの何処で手に入れたのか、全然心当たりがなかった。だけど、車掌さんはシワのめだつ顔でにっこり微笑むと、わたしの手から紙切れをとると、小さなハサミみたいなもので、パチンと切符を切った。

「段差がごさいます。お気をつけてご乗車下さい」

穴の開いた切符をわたしに返すと、車掌さんはわたしの手をとって、銀河鉄道『カシオペア・レールウェイ』のタラップに乗せる。

「しゅっぱーっ!!」

車掌さんの声に合わせて、列車が揺れ、タラップを昇りきったわたしの視界は光で満たされた。そして、わたしは意識を失った。

たぶん、暗闇から、明るい車内に入って、光に目がくらんだんだと思う。だけど、次の瞬間目を覚ましたわたしは、座席に座っていた。そして、窓の外には無数の星がきらめく、星の海。わたしはその星の美しさに見とれてしまった。毎日、星のない空を見上げていた、わたしにとって、星の海の光景は憧れといってもよかった。

「やっと目を覚ましたんだね、お姉ちゃん」

星の海に見とれていたわたしは、向かい合わせの座席に、見知らぬ外国の男の子が座っていることに気づいていなかった。

「君は……？」

「ぼくも乗客だよ。ようこそ、星の旅へ」

そう言って、あらためて車窓から広がる不思議な景色と、星の旅という言葉に戸惑ってしまったわたしに、ブルーの瞳をもつ男の子は、そばかすの散りばめられた顔でにっこりと微笑んだ。

それが、ハンカチをくれた男の子だった。

第二話 五色の金平糖

カシオペアを見つめながら、星の海を渡る銀河鉄道に乗って、どのくらいの時間が過ぎただろう。わたしは、時間を確かめるための腕時計を鞆の中に置いてきてしまったことを思い出した。今頃、持ち主のいなくなってしまうた鞆は、駅のホームで心細く思っているだろう。

相席したブルーの瞳の男の子はもうとつくの昔に降りてしまった。アルフェラッツ駅からの新しい乗客の姿はなく、静かな車内でわたしは一人で窓の外に見える、星の海を見つめていた。幸いだったのは、あれから涙はこぼれていない。だから、ブルーの瞳の男の子がくれたハンカチは、大事にブレザーのポケットに仕舞ってある。

莫迦なわたしにも、現実的なものの見方をする「ものさし」がある。だって、わたしだって、息をして、水を飲んで、食べ物を食べて生きている人間だもの。だから、そういうものさしは誰にでも備わっている。ただ、ちょっとだけ違うのは、わたしのものさしは、他のみんなのものさしよりちょっとだけ短かった。

その、短くても、現実的なものの見方をするものさしに照らし合わせれば、わたしが見ている車窓の眺めは、ありったけ不思議なものだった。

本を読むのは好き。とくに、外国の童話やファンタジーの本を読むのが好き。一番好きなのは、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」。もうページが擦り切れるくらい、何度も読み返した。ジョバンニとカムパネルラという二人の男の子が銀河鉄道に乗って、旅をする不思議な物語。

その物語が不思議であれば不思議であるほど、わたしは本の世界に没頭して、たったひと時でも、心が重いことを忘れられた。だから、本を読むのが好きだった。

そんな本の世界に、車窓からの眺めはよく似ていた。

いくつもの星が輝いて、漆黒の空を彩る。時折、それらはパツと明るく輝いて、そして消えていく。だけど、次の瞬間には、新しい星がキラリと生まれる。それは、写真でしか見たことのない宇宙のよう。だけど、少し固いガラスの窓を開ければ、星の海を渡る、すこし甘い匂いのする風が、わたしの長い髪をそよそよとなびかせるのだ。

その理由を探る気にはなれなかった。わたしの現実的なものの方をするものさしは、短くて、そんなことどうだっていいことのように思えたから。ここが何処で、何故わたしが銀河鉄道に乗っていて、何処へ行くのか、それを知ることが、きつととても大切なことじゃない。

大切なことは、わたしはこの列車に乗って、行くべき場所があるということだけ。

だけど、その旅の理由は話してはいけない決まりだと、ブルーの瞳の男の子は言った。だから、口にはしない。今はただ、ぼんやりと星の海を眺めていたい。

カシオペア・レールウェイは、みずかめ座のフォーマルハウトを通り過ぎて、くじら座をぐるりとまわって、次の駅を目指す。そのフォーマルハウトが後ろに小さくなっていく頃、突然前の車両から繋がるドアが、がらりと開いた。ぼんやりし続けていたわたしは、窓から顔を離して、車内に視線を移した。

がくと、列車が大きく飛び跳ねる。同時に「ひゃあっ！」とお婆さんの悲鳴が聞こえて、わたしはとるものもとりあえず、席を立った。

「大丈夫ですか？」

通路の真ん中でしりもちをつくお婆さんに恐る恐る尋ねると、お婆さんは少しばかり顔をしかめつつ、わたしの顔をジロリと見つめた。少しだけ、怖かった。

お婆さんは、藤色の着物を着ていて、その首元には風呂敷包みを

巻き、日傘を手にしていた。何処から見ても、奥さまと呼ばれていないに違いない。もちろん、それは勝手な想像で、名前も知らないお婆さんだった。わたしは、そんなお婆さんの視線に怯えて、何を言われるのか、今すぐ逃げ出したい気持ちになった。それだけ、お婆さんの眼は鋭かった。

でも、逃げ場所なんてない。わたしが困った顔をしていると、お婆さんは、ゆつくりと立ち上がり、着物のすそを軽くはたいた。

「よつこらしよ。歳をとると、どうにも足元が覚束ない。恥ずかしいところを見せてしまった。どうやら、足をくじいてしまったみたいだ。すまないけれど、あんたの席まで、肩を貸してはくれないかい？」

お婆さんはそう言うと、さっきまでの鋭い目つきが嘘のように、上品な笑顔になって、わたしに微笑んだ。わたしは、お婆さんに肩を貸し、わたしの座っていた座席の向かいに案内することにした。

「すまないねえ」

座席に腰を下ろすと、お婆さんはほっと息をつく。そうして、わたしに再び優しく微笑みかけた。向かいに座る頼りないちっぽけな女の子が、本当は超がつくくらい口下手で、人付き合いが苦手なことに気づいて落胆し、微笑が消えることが怖くて、わたしは「あの足。大丈夫ですか？」とお婆さんに尋ねた。

お婆さんは、少しばかり身をかめると、着物のすそからのぞく白い足袋に包まれた踝にそっと触れて、

「しばらくすれば、痛みも引くだろうよ」

と、わたしに答えてくれた。

だけど、それから思うように会話は進まない。会話を見つけたくても、わたしは何を話していいのか分からなかった。いくつか、お婆さんから質問されても、短く答えるだけで、ぶつりと会話が消えてしまう。だんだんとお婆さんの顔は曇っていき、とうとう、わたしたちの間には沈黙が訪れ、やがて列車の音だけしか聞こえなくなってしまう。

わたしは、所在無く、身動きも取れないままで、窓の外をぼんやりと眺めた。

一日中だれとも口をきかなくても平気だった。言葉らしい言葉を発しなくても、生きていくだけなら、息をしていればいい。見ず知らずの人に話しかけて、怖い思いをするくらいなら、ずっと一人ぼっちでいいと思った。そんな気持ち、誰にも分からないと思う。何を言ってるんだコイツって、白い目で見られても、わたしは何にも触らずなにも触れられない場所で、ただじっと星の海を眺めていたら、それでよかった。

だけど、お婆さんは沈黙が嫌いな人だったみたい。しばらくすると、おもむろに口を開き、

「あんたは、おおぐま座のドウーベから来たのかい？」

とわたしに尋ねた。その顔は、まるで超能力者……うっん、魔女のお婆さんみたいだった。わたしは、思わず驚きを口にせずにはいられなかった。

「どうして分かったんですか？」

「どうしてって、そんなもの顔を見れば分かるさね。人は何処から来たのか、何処へ行くのか、ゼーんぶ顔に書いてある」

お婆さんはそう言うのと、につこりと笑った。顔に書いてある、と言われても、わたしにはお婆さんが何処から来て、何処へ行くのかまるで分からなかった。

再び会話が途切れてしまう。そこから、どんな風に広げればいいのかも、わたしには分からなかった。すると、お婆さんは溜息をふうと吐き出して、

「あんたは、よほど物静かなお嬢さんなんだね」

とわたしに言った。その言葉の裏にどんな意味が込められているのか、そんなことを想像してしまう。だけど、お婆さんの言った言葉は、額面どおりの言葉だった。

「あたしの娘によく似ているよ、あんた。あの子も、引っ込み思案で友達がいなかった。寂しい毎日を送ってたんだ。遠い遠い昔の話

「ただどね」

そう言つと、お婆さんは膝の上においた、風呂敷包みを開いた。中には、漆塗りの小さなお弁当箱のようなものがあつて、お婆さんはにっこりと笑つとその蓋を開いた。わたしはそのお弁当箱の中身に驚いて、思わず「わあっ！」と声を上げてしまった。

お婆さんはからからと笑う。わたしは恥ずかしくて俯いた。すると突然、「お裾分け」と言つて、お婆さんはお弁当の中身をつまみだけ、わたしのひらの上にそれをいくつか載せてくれた。そのしぐさは、ブルーの瞳の男の子とよく似ていたけれど、わたしの手のひらに乗せられたものは、星くずの絹のハンカチではなかった。

とげとげのつぶつぶ。青、赤、白、黄に緑。色とりどりの小さな砂糖の塊には、二十四個の棘がついていた。わたしはそれを「金平糖」と呼ぶことを知らなかった。

「暗い顔をしているときには、甘いものが足りないんだ」

そう言つて、お婆さんは金平糖を一粒自分の口に放り込んだ。そして、わたしにも「お食べ」と勧めてくれる。わたしは、手のひらから、一番きれいな青い金平糖を一粒つまみ上げると、それを口に運んだ。

甘い味が口いっぱいに広がっていく。甘いものはあまり食べないけ、嫌いなわけじゃない。ただ、甘味の奥に、すーっとハツカの味がする。ハツカはちよつと苦手だった。

「お、おいしいです」

わたしが無理してぎこちない顔をして感想を述べると、お婆さんはまたからりと笑つて、

「嘘が苦手なもの、あたしの娘によく似ている」と言つた。

「ハツカが苦手なら、他の色をお食べ。赤は桜の味。黄色はかりんの味。緑は梅の味がつけてあるからね。白いの、砂糖だけ。あたし特製の金平糖だ。どれか気に入った色があるはずさ。だから好きなのお食べ」

わたしは、こくりと頷いて、黄色い金平糖を、すーすーする口に放り込んだ。わたしの好きな味だった。わたしは何故だか嬉しくなつて、手のひらに残された金平糖のつぶつぶを眺めた。それは、星の形に似ている。きつと星くずは金平糖で出来ているんじゃないかな、と想像が翼を広げ始める。

そんなわたしのことを、ほほえましく目を細めていたお婆さんは、不意に涙を流した。わたしは、驚いてしまった。鋭い目つきから一変して、やさしい顔になって、そして今度は悲しそうな顔をする。わたしみたいに、作り笑顔と能面しか持っていない子には、どうしてそんなに顔色が変わるのか分からなかった。

「あたしの娘もね、星の砂糖で出来た金平糖が好きだった……」

ぼろぼろと落ちる涙は、お婆さんの膝の上で、灰色の金平糖になつて砕け散っていく。わたしはどうしていいのか分からず、おろおろとしてしまった。そのとき、ふとわたしの制服のポケットに仕舞われたハンカチのことを思い出した。

わたしは左手で、もらった金平糖を握り締めると、ポケットからハンカチを取り出して、お婆さんに差し出した。お婆さんは少しだけ驚いた顔をしながらも、ハンカチを受け取り、その角で頬を伝う涙をふいた。涙は、たちまち星くずの絹のハンカチに吸い取られていった。

「また、みつともないところをみせてしまったね。いやだね、歳をとると涙もろくなってしまう。みつともないついでに、あたしの思い出話にでも付き合ってもらおうかね。あたしの降りる駅はまだ遠い……」

お婆さんは、わたしが答える前に、列車の揺れにあわせて揺れるランプを見つめながら、その黒い瞳に遠い昔を映し出していた。

お婆さんには、一人娘がいた。それをお婆さんは遠い昔のことだと言った。お婆さんの娘さんはわたしと同じで、引っ込み思案で消極的で、どこか存在さえもないような女の子。だけど、わたしとは違って、彼女には取り柄があった。詩をつくること。毎日、誰とも

交差しない単調な日々の中で、彼女はいくつもの詩を取りとめもなく、ノートに綴った。

「それが、このノートさね」

と、お婆さんはお弁当箱の下から、一冊の大学ノートを取り出した。タイトルも名前も書かれていないけれど、その古びたノートを開くと、小さくて丸くて可愛い文字で、たくさんの言葉が書き添えられていた。詩に詳しくはないけれど、その言葉一つ一つが、とても透明に透き通っていて、読んでいるだけで、ずっと身に染みてる。それは、お婆さんの娘さんに神さまが与えた、才能だと、わたしは思った。

彼女が、同じように思ったのかは、知ることは出来ないけれど、彼女は大学ノートに言葉を綴るうち、詩を書く人になりたいと言う夢を持った。

「あの子はどちらかと言えば無口で、言葉が足りない子だった。一方、あたしは女手一つであの子を育てて、苦労も一通り経験した。だから、せめてあの子には、何不自由ない人生を歩んで欲しくて、あたしはあの子にレールを押し付けたんだ。そして、あの子は最後の詩を綴った」

そう言って、お婆さんは大学ノートの最後のページをめくった。

『わたしの瞳に映った透明な世界の中で

わたしの傍を過ぎる鮮やかな季節の中で

生きることが難しくて 頬を涙にぬらして

鳥になる翼はなく 星にも花にもなれない

誰も代われない自分 わたしはわたしだって

泣きたくもないのに 涙があふれる

本当は弱いから

振り返って躓いてる自分が ただ嫌いだった』

少しだけ文字が震えていた。最後のあたりには、点々と染みが落ちていく。言葉少なく、込められた思いはわたしの胸をぎゅっと締め付けた。

「とうとう最後まで、あの子は何を想い、何を考えて、何を感じていたのか、あたしには分からなかった。ただ、確かなことは、あたしがあの子の夢を台無しにして、二度とあの子は金平糖を口にすることはなかった。星に似てるって、喜んで頬張っていた、金平糖を……」

お婆さんの話を聞きながら、わたしは手のひらの上の、金平糖を見つめた。

「だから、届けに行くんですか？」

不意にわたしは、お婆さんに尋ねた。するとお婆さんは、「顔に書いてあったかい？」と言いつつ、人差し指を口許に当てた。

「旅の理由は話してはいけない決まりなんだよ。あたしには、次の駅に待っている人がいる。教えられるのはそれだけだ」

それが誰なのかは、すぐに分かった。だけど、わたしも口にはしなかった。

「でも、あんたの思っている通りかもしれないね……。言葉が足りなかったのは、あたしの方かもしれない。その言葉を、見つけることがようやくできたんだ。」

お婆さんはそう言うと、まだ涙が目じりに残る顔で、にっこりと笑った。

第三話 自分を研究する博士

言葉が足りないのは、わたしも同じ。誰かがこんなことを言っていた気がする。

「人間は、とても出来ない生き物で、想いを伝えて、分かり合うことが出来なかった。だから、わたしたちのご先祖さまは、言葉を覚ええた。拙い想いを言葉に乗せて、相手に伝える。それが、人間と言う生き物だ」

だとしたら、言葉が足りないわたしは、出来ない人間の一番出来の悪い子だということになる。だから、お母さんとわたしの間にも、言葉はほとんどなかった。

いつも、学校に行くとき気分が悪くなる。授業の所為じゃない。勉強は苦手だけど、そんなことで気分が悪くなるわけじゃない。ただ、教室の隅っこで、ぼつんとしていると、明るい未来に、わたしは中^あてられる。すると、気分が悪くなる。ちょうど、あの時みたいに、胸とお腹の中間辺りが、ぐいっと下に引っ張られたような感覚を覚える。すると、動悸が激しくなつて、吐き気がして、全身が重力に負けそうなくらい重たくなってしまう。

保健の先生は「疲れてるのよ」って、わたしに早退届けをくれた。半ば、事務処理みたいなもので、わたしが顔を出すたびに、保健の先生の眉がびくりとするのを、わたしは知っている。だけど、先生は影の薄いわたしの名前も知らなければ、本当にそんな風に思っていたのか、よく分からない。

だけど、早退届けを出して、家路に就くと、お母さんはいつもわたしを叱った。

「ズルすることばかり覚えて、この先、生きていけるの？ ちゃんとしなきゃダメじゃない。お母さんが口を酸っぱくはして言っていること、いい加減、分かってちょうだい」

友達が出来ないのも、心が重いのも、気分が悪くなるのも、全部

わたしの所為。一步を踏み出そうとしない、消極的なわたしの所為。お母さんは、何度もわたしにそう言った。

だけど、一步を踏み出すにはどうしたらいいの？ 踏み出そうとするたびに、どんどん心が重くなつて、怖くて怖くて泣きたくなるのは、どうしたらいいの。ねえ、教えて。

わたしは、お母さんに問いかける言葉が足りなかった。だから、お母さんのお説教を、「はい」「はい」と短い返事をする。そうして、分かっている風を装って、また誰かを落胆させることの繰り返し。世の中には、デフレ・スパイラルと言う言葉があるけれど、わたしの場合は、はいはい・スパイラルだ。そうやって、自分の首を絞めていることに気づいているのに、どうしたらいいのかわからない。

『それは簡単なこと。勇気を出して、一步踏み出せばいい』

きつとみんなそういうに決まっている。だけど、わたしには、その一步をどうやって踏み出したらいいのかわからない。そこに、「勇気」などという漠然としていて、捉えどころのない曖昧な言葉で諭されても、わたしのバカな頭では、全然理解なんか出来なかった。

欲しいのは、精神論じゃなくて、具体的な教えなんです！

そう言つて、誰かに教えを請うことは、我侭が過ぎるのかもしれない。だけど、わたしは教えを請うための言葉さえ足りなかった。

だから、誰にも思ひは伝わらない。そうして、わたしはいつの間にか、伝わらないことの方がいいんだと、思うようになっていた。

お婆さんが降りた駅は、とても小さな駅だった。名前は、おうし座のエルナト駅。すっかり足の具合も良くなったのか、お婆さんはわたしに、もう一つまみの金平糖をくれると、「よい旅を……」と言いついて、列車を後にした。

駅のホームで、誰かがお婆さんを待っている。顔はよく見えなかったけれど、その顔を確かめる必要はなかった。わたしは、苦手な

ハツカの金平糖だけさつさと口に放り込んで、残りの金平糖を星くずの絹のハンカチに包んで、ポケットに仕舞った。

口と鼻が、すーすーする。

お婆さんの娘さんは、このハツカの金平糖が一番好きだったらしい。わたしは、たぶん一番きらい。やっぱり、わたしと彼女は全然違うのかも知れない、と思いつながら、わたしは開け放した車窓から吹き込んでくる、星の海を渡る風に当たった。すると、少しだけ爽やかな気がしてくる。

「おや、ハツカの匂いがする」

突然、何の前触れもなく声が出て驚いてしまったわたしは、溶けかけの金平糖をぐくん、と飲み込んでしまった。

「しかも、この香りは、Ｌ－メントール。和種薄荷わしゅはっかだな」

優しいチエロのような声。何処から聞こえてくるのかはつきりせず、わたしは窓を閉めて、周囲を見回した。

「近頃は、合成ハツカが多くて、この香りを楽しむことは出来ん。そもそも、この香りには、古い歴史があつて……」

なぜか、唐突なハツカの講義が始まってしまふ。日本におけるハツカの歴史に始まって、ハツカ脳の精製方法に到るまで。どこか、学校の授業のような気がしたけれど、学校じゃそんなことは教えてくれない。

そんな講義の隙間で、カツカツと、足音が聞こえてくる。歩幅は大きくて、それが大人の男の人の足音だと気づいたわたしの前に、後部車両から現れたのは、背が高く、面長で、背広のよく似合う、ちよつと不健康な顔色をした、神経質そうなおじさんだった。

「おじさんはないだろう。こう見えても、まだ四十になっていない」
そう言われて、またしてもわたしは驚いてしまふ。すると、おじさんは、少しばかりニヤリとして、「顔に書いてある」と言った。
そんなに、わたしの顔は分かりやすいのかな？

「それに、おじさんという表現は正しくない。私は博士と呼ばれることを好む」

おじさん、改め博士は、どかりとわたしの向かいの席に腰を下ろして、再びニヤリと笑った。わたしは、そんな博士から視線を泳がせながら、何の「博士」なんだろ、と思った。ハツカのことには詳しいから、植物の博士？ それともハツカ博士？

「もうじき、ふたご座と、オリオン座の間を抜ける」

何の前触れもなく、博士は窓の彼方を指差した。

「この列車は、オリオン座のベテルギウス駅には停車しないから、そのまま、おおいぬ座のシリウス駅へと針路をとる。星の海でも、一番大きな駅舎だ。カシオペア・レールウェイは、その駅に乗り付けられる、数少ない銀河鉄道と言っても過言ではない」

鉄道博士なのかな？ 世の中には、電車が好きで、とつても詳しい人がいる。極めればなんとやらで、その道に詳しい人を博士と呼んでも、間違いじゃないと思う。ただ、博士はわたしの心の中を読み取ったかのように、頭を左右に振ると、

「私は、ハツカ博士でも、鉄道博士でもない。私は何を隠そう『自分博士』だ」

胸を逸らして、どうだエッヘン、と言わんばかり。だけど、聞き慣れない言葉に、わたしはきょとんとしてしまう。すると、博士は「ハツハツハツ」と軽快に笑った。

「自分とは何者で、何を学び、何を知り、何処へ行き、何をするのか。それを研究するために必要な知識を集めれば、自ずからハツカのことに詳しくなる」

何処をどうしたら、ハツカに詳しくなるのか、よく分からないけれど、博士の言う「自分博士」が私の思っているような「博士」ではないことは、よく分かった。

「知るということは、人間本来の欲求でもある。分からないことはすべてが不安につながり、明日を生きる力を削いでいく。不安とは、それだけに人の心を縛り付けて重たくしてしまうものなのだ。そう、さも船の錨のようにね」

「心を重たくする……」

わたしの眩きが聞こえたのか、博士はうんうんと頷いて続けた。

「だから、人は知りたいと願う。知ることが、生きること。知りたくもない、分かりたくもない、それでいいんだと思えば、それは死んでいるのと同じこと。明日は永遠にやってこない。だが、人間にはもつとも不可解なものがある。それは何だと思うかね？」

博士の突然の質問に、わたしは飛び跳ねそうになった。学校の授業中に、突然答えを求められた時のような気分。しばらく考えて「わかりません」と、答えると博士は、短く溜息を吐いた。それは、わたしに対して呆れているかのような溜息で、わたしは胸の中が苦しくなってしまった。言葉足らずなわたしは、たった一言で相手を落胆させてしまうことが出来る。それは、特技といってもいいのかもしれない。他人の期待を裏切れることは、わたしにとって不可抗力。「いや、君に落胆などしていない。君とは出会ってまだ、間もないではないか。私が君の何を知っているというんだ？ そのように考えるのは、芳しくはない。人は、誰でも相手に落胆する。だからと言って、その相手のことを嫌いになるわけではない。そうして、だんだんと相手のことを理解していくんだ」

またもや博士は、私の心の中を読んだかのように言った。多分、わたしがそんな顔をしていたのだ。顔に書いてある、というのはまんざら嘘ではないみたい。

「答えを言っていないかったね……。人にとって、最も不可解なものは、自分だ。自分は他人ではないから、自分のことを見ることは出来ない。鏡に映してみても、それは単に『自分という殻』を外側から見ているに過ぎない。それで、何を知ることが出来るのか」

「自分という殻？」

「自分の顔、自分の髪、自分の手足、自分の服。外見と呼ばれるそれらのことを、わたしは研究の過程でそう呼んでいる。外見とは、相手に与える第一印象の要。だが、内面は他人に与える本当の理解の要。だが、人は自分という殻を見ることは出来ても、その中に潜むものまでは見る事が出来ない。そうして、分からないことは不

安になつて、不安はやがて明日を奪う。それをそのままにしておくわけにはいかない。だから、私は自分博士になつた」

どうして、そのままにしておいてはいけないのか、聞きたいことはあつたけれど、口にするのが怖かつた。博士に、どんな風に思われてしまうのか、それを知るのが怖くて、わたしは俯いてしまった。「心とは偽ることの出来るもの。本心を自分でも分からないように隠してしまえる。たとえば、星の輝きを覆い隠す、眩い満月があれば、それは安易に可能なことだ。それ故に、複雑に入り組んだものをひとつずつ紐解いていくことは難しい。だが、自分とは何者なのか、それを知れば、恐怖は自ずとなくなっていく」

黙りこくつたわたしに、博士は先生のような口調で語りかけてくる。だけど、博士の言っていることの真意が、わたしにはよく分からなかつた。だけど、分かる必要はないと思う。だつて……。

「カシオペア・レールウェイに乗る人は、誰もが旅の目的を持つている。君も、私も。その先に何があるのか、知っているから、もうそれ以外は知りたくないと思うのならそれでもいい。もう、知る必要もないのだから」

博士はそう言つと、わたしと同じ沈黙に浸る代わりに、窓をそつと開けた。星の海の風が、わたしの髪をそよそよとなびかせる。時折、金色の光が砕け散つて、イオンに変わり、それが風に乗つて、車内に吹き込んできた。わたしたちは、会話もなく、ただぼんやりとそのイオンを見つめていた。

博士の言つたとおり、カシオペア・レールウェイは、ふたご座とオリオン座の間を通り抜けていく。オリオン座には、いくつもの星雲の浜辺があつた。そのひとつに、赤い大きなプリズムが浮かんでいる。それが、カシオペア・レールウェイの通過予定である、ベテルギウス駅だつた。駅舎の中で、何か白いものがうごめいている。それは、車窓から見ると砂粒ほどこししか見えなくて、何なのかはつきりと分かつたのは、駅舎に滑り込んだとき、泣き声が聞こえたからだ。

「羊……！」

駅舎の中で、白い帯のように列をなすのは、ふわふわの毛をした羊だった。それらが何頭も折り重なるようにして、つぶらな瞳を通り過ぎる列車の中の、わたしたちに向ける。

「そうか、羊飼いの季節か。ベテルギウス駅には、オリオンの浜辺で育った羊を他所の星座に運ぶために、時折ああして、羊が集められるんだ。ベテルギウスの羊の毛は、星くずの絹と同じで、繊維として重宝されている。もっとも、星くずの絹は、星捕りが星を集めたくずだがね」

「何でも知っているんですね」

わたしが言うと、博士は弦をはじいたようにまた軽快に笑って、「いや、知らないことだらけだ。特に、自分という人間については、結局分からないはまだ。お粗末な話さ」

と、やや自嘲するかのように頭をかいた。

ベテルギウス駅を通過した、カシオペア・レールウェイはそのまま、再び星の海を駆けていく。目指すのはおおいぬ座のシリウス駅だった。どうやら、シリウス駅には少しの間停車するらしい。

「次の駅では、検札が待っている。そろそろ、切符を用意しておかなくては」

博士は、遠くに見える青白い光に目を細め、ポケットから切符を取り出した。

第四話 シリウスの検札

星を探そうとしたことがある。わたしは、天文学に興味があるわけではない。ただ、夜空に浮かぶ、キラキラしたものを見つめていたいと思った時期がある。まだ、心が重たくなる前の話。両親にせがんで買ってもらった、星の図鑑は、子どものわたしには難しすぎて、その一部も理解することは出来なくて投げ出してしまった。やがて、年月が経って、学校で天体の授業を受けた頃には、そういう興味もなくなっていて、星の図鑑が何処へ行ってしまったのかも思いつくことは出来なくなっていて、わたしはただ、教科書に書いてある文字をひたすらに追いかけるだけになってしまっていた。

簡単な話、現実と理想は決して繋がりが合うことのない、二つの軸で出来ている。

それでも、いくつかの星の名前は知っている。そのひとつが、シリウス。夜空で一番明るい星だから、両親が寝静まっても、こっそり夜更かしして部屋の窓からずっとシリウスを探し続けた。だけど、結局見えなかったのは、わたしの住んでいた家が、他の家に囲まれていたからで、そのずっと下に目指す星があったことを、わたしはついに知ることはなかった。

どこか中途半端な人生なのだ。自分で諦めのラインを引いて、そこで立ち止まる。待っているのは、暗闇だけだと知っているのに、わたしは立ち止まることを躊躇しなかった。そうして、心が重たくなっていくことが、いつの間にか当たり前になって、夜空を見上げることなんてなくなっていた。

本当は、そういうキラキラしたもの、自然なもの、やわらかく棘のないものが、一番大切で、そうした中でしっかりと地面を踏みしめて生きていくことが出来たなら、わたしは心が重いと感じなくて良かったのかもしれない。そう分かっているのに、出来ないのは、わたしが悪い。

それでも、わたしは車窓からの眺めに、少しだけうつとりとした。いくつもの星雲の海岸を地表に例えるなら、その虚空に燦然と青く輝くその星は、わたしがずっと探していた、シリウス。

ふと、わたしの頭の中に、疑問が過ぎる。いくつもの駅、いくつもの星座を通り過ぎてきた、この列車からは、もう「カシオペア座」は見えない。それに、わたしがこの列車に乗ったのは、始発の「おぐま座」。カシオペアの駅には一度も立ち寄っていない。それなのに、どうして、カシオペア・レールウェイと言うのだろうか。

「カシオペアは、伝説の王さまケフェウスの妻だった。とても、傲慢することが好きなカシオペアは、ある日、海の妖精と、自分の娘であったアンドロメダの美しさを比べ、娘の美しさを自慢して廻った。すると、それを耳にした、海の神様ポセイDONは烈火のごとく怒り、ケフェウス王の国に、災いをもたらした」

博士は、わたしの疑問を察知したのか、大きな手の中で切符を転がしながら、カシオペア座にまつわる伝説を話し始めた。

「ポセイDONの怒りを鎮めるためには、アンドロメダをくじらの生贄として捧げるしかない。ケフェウス王とカシオペアは、泣く泣くアンドロメダを生贄に差し出した。このアンドロメダ姫は、後に勇者ペルセウスによって救い出されるのだが、それはまた別のお話だ……。やがて、歳月が過ぎ、カシオペアは星になった。だが。ポセイDONは、カシオペアを星の海の下で休息を取ることを許さなかった。そのため、カシオペアは永遠に星の海を巡り続けなければならなくなった」

「悲しいお話ですね」

「一度の過ちが、永遠の罰になる。この伝説が由来なのかどうかは知らないが、旅人を乗せて、星の海を巡り続ける列車にはおあつらえ向きの名前だと思う」

そう言って、博士は切符の隅に書かれた、Wのマークを指し示した。

一度の過ち……。わたしに過ちがあるとすれば、いや、たくさん

あるけれど、その中でも一番大きな過ちは何なのだろう。ふとそんなことを考えてしまう。たくさんのおちの中で、人は生きているのかもしれない。星よりもキラキラした未来を歩く同級生たちも、おちの中で生きているのかも知れない。ただそれらに、比べるまでもなく、わたしの過ちは許されるものじゃない。

沈黙の中で、わたしはずっと考えていた。わたしが手元の切符で行き着く場所は、わたしが思っているような場所ではないかもしれない。一度そう思うと、だんだんと不安がこみ上げてくる。博士の言ったとおり、不安は恐怖に変わり、わたしの心を重たくしていく。

みつともないとは分かっているのに、わたしはぼろぼろと涙をこぼした。博士は、びっくりして「どうしたんだい!？」と、わたしに問いかけたけれど、わたしは答えられなかった。

「次は、おいぬ座のシリウス駅。シリウス駅では、二十分間、検札のために停車いたします。検札が終わるまで、どうぞ席をお立ちにならないようにお願いします」

わたしの泣き声を隠すように、車内にアナウンスが響いた。やがて、列車は徐々にブレーキをかけて、シリウスの駅舎へと入っていく。シリウス駅は、青い二つのプリズムで出来ていた。ひとつは、複雑な形をしながらも、キラキラと輝いていて、もうひとつはとても小さくぼやけた白い光を放っていた。

「伴星はもう駅として使われていないんだ。その代わり、銀河の氾濫を教えてくれる標として、使われている」

わたしの気を逸らそうと、博士は白い小さなプリズムを指差した。そこには、プラットフォームらしき名残があるだけで、中には計器がたくさん付いた機械のようなものと、そこで忙しく働く作業着姿の人影が見えた。

「ああして、つねに銀河の流れを見張っている。働いているのは、犬だけだね」

と、博士の言うとおり、人影に見えたそれは、よくよく目を凝ら

すと、出っ張った鼻と顎、つんと尖った耳をした銀色の犬だった。

「彼らは天狼と呼ばれているんだ。銀河の流れは、銀河鉄道の運行にも影響がある。特に、星の海中を巡るカシオペア・レールウェイには。だから、彼らはひと時も休むことなく、ああして働くんだ。それを哀れと思うか、それとも素晴らしいと思うかは、君次第だね」

博士の言葉を他所に、犬たちはせつせと機械のレバーを操作して、プリズムの先端に取り付けられた、輪っかのようなものを動かす。それを「天気輪」といい、銀河の流れに狂いがなければ調べる装置なのだそうだ。

彼らは、何を思い、何を考え、何を感じ、働いているのか、わたしには到底分かるわけもなく、哀れだとも、素晴らしいとも思えなかった。その代わり、彼らは定刻になると、機械に開けられた小さな窓から、一切れの肉が落ちてきて、それを美味しそうに頬張っている。彼らに与えられる、それが報酬だった。報酬のため、彼らは働き、時を費やしていく。それは、彼らにとって理想の仕組みなのかもしれない。

そういう歯車に、ちゃんと乗っかることの出来ないわたしには、一切れの肉に、魅力は感じない。

がらり。後ろの車両からつながっているのドアが開けられて、黒い服を着た小さな女の子がやってきた。その黒い詰襟の制服は、おぐま座でわたしの切符を切ってくれた車掌さんとおなじものだったけれど、あの車掌さんは男の人だったのを覚えている。

「乗客を泣かせるのは、感心しないわ、博士」

女の子の車掌さんは、わたしが泣いたのは博士の所為だと思ったのか、博士を睨み付けると、小さな手を腰に当て頬を膨らませた。妙に大人びた口調と、鈴の鳴るような可愛らしい声のアンバランス加減が少しだけ、可笑しかった。

「いや、私が泣かせたわけではないんだが……。うむむ」

博士は、困ったような顔をしながら、わたしと車掌さんを交互に

見た。わたしは、「博士の所為じゃない」と言おうとしたのに、なぜかその言葉が出なかった。困ったことに、どう説明していいのかわからない。わたしがおたおたしていると、車掌さんは溜息をつきながら、

「言いたいことがあるなら、はっきりいいなさい」

とわたしに言って、左手を差し出した。切符を見せろ、という合図だ。わたしはまだ切符をポケットから出していないことを思い出して、慌てて制服のポケットを探った。そして、切符を取り出した拍子に切符と一緒に星くずのハンカチが床に落ちて、中に包んでいた金平糖がその場に散らばった。

「まあ、綺麗な金平糖」

車掌さんの前を、金平糖は飛び跳ねて、反対側の通路から飛び出していく。そして、駅舎の向こうへとまるでボールが弾むように飛んでいくと、それは、銀河の見張り台がある伴星へと飛んでいき、そこで働く犬たちの口の中に入った。

わたしは、半ばあつけにとられて、その不思議な光景を見つめていた。

「全部天狼に捕られちゃったわね。ご愁傷様」

車掌さんは、にべもなくそう言うと、ハンカチとわたしの切符を拾い上げてくれた。そして、ついでに、切符を確認して、スタンプを押す。『検札・シリウス』と書かれた、スタンプの文字は青色だった。

博士の切符も確認した後、車掌さんはいつの間にか、いなくなっていた。

「もったいなかったな。あんな綺麗な金平糖を、全部天狼どもに持っていかれて、残念だったな」

「いえ……その、わたしっ」

わたしが謝ると、博士は少しばかり驚いて、きょとんとする。

「ああ、さっきのことか。いや、気にしていない。検札係の車掌は、すこし言葉に棘がある。ああいう性格なんだ、気にしていたらキリ

がない。べつに、乗客を泣かせたら、降ろされるなんて決まりはないからな」

「でも、わたしの所為で……」

「そう思うなら、泣かないこつた。君だって、ガキじゃないんだから」

わたしは、博士の言葉に頷いて見せたけれど、でも自信はなかった。

辛くても、苦しくても、わたしの感情は薄っぺらで、泣いたり笑ったりするのは、あんまり得意じゃない。人前で笑うことなんてないし、だからと言って泣くのは莫迦らしいと思う。わたしは、そういう自然なことが、自然に出来ない。

病氣じゃなくて、頭が悪いから。だから、言葉が足りなくて、勘違いさせたり、落胆させたりする。せめて、足りない言葉でも、必死に伝えようとすれば、それは必ず伝わると、人は言う。だけど、伝わらないものは、どんなにしたって伝わることはない。わたしの思いは、誰にも届かない。

届いたところで、わたしにはどうしたらいいのか、全然分からない。ありがとう、ごめんなさい、おはよう、こんにちわ。そんな当たり前のような言葉も怖くて口に出来ない。

「ありがとう」「べつに感謝される覚えはない」「ごめんなさい」「許さない」「おはよう」「……」「こんにちわ」「……」

そんなに怖い思いをするのなら、わたしは何も言わない。言わなければ、怖い思いをしなくてもいい。笑わなくても、泣かなくても、息は吸える。

心にちゃんと鍵はかけてある。誰にも触れられないように、誰にも触れないように。

それなのに、わたしはカシオペア・レールウェイに乗ってから、涙を流し続けてる。きつと貯めていた分の涙を全部使い切るつもりなのだろう。

それでもいい。もうなんだっていい……。見つめるべきものは、もうこの先にはないのだから。

わたしがハンカチに引っ付いた金平糖を見つけたのは、カシオペア・レールウェイがシリウス駅を発車してから、しばらく経つてのことだった。

お婆さんにたくさんもらったのに、あっという間に儚く消えた、金平糖はあと二つしかなかった。わたしはそのうちのひとつ。白い金平糖を博士に手渡した。お詫びのつもりだったけれど、それも言わないから伝わらない。

だけど、「甘いものは苦手だ」と言いつつも博士は、白い金平糖を口の中に放り込んだ。わたしは、黄色の金平糖を食べた。甘味が口いっぱい広がる。やっぱりハッパよりも、こっちのほうが好きだな、と思っていると、博士はごそごそと上着のポケットを探り、なにやら銀色の紙を取り出した。

「私は次の駅で降りる。これは、金平糖のお礼と饞別代りだ。こんなもので申し訳ないが、とっておきたまえ」

これは何だろう。と思いながら銀色の紙をしけしげと見つめてしまふ。ちょうど、手のひらにすっぽりと収まるくらいの大きさで、紙ではなく、布ともビニールともプラスチックともいえない、不思議なつるつるしたものだった。

「それは、宇宙服の切れ端だ。ちょうど手帳の間に挟まっていたんだ。君の役には立たないかもしれないが、この偉大なる自分博士と君が出会った記念に」

そう言うと、博士はにっこりと笑った。記念に宇宙服の切れ端なんていうおかしなものをもらえとは、思っても見なかったわたしは、少しだけ嬉しくなった。

列車は、すべるように星の海を渡り、やがて目の前に、しし座が見えてくる。

「次は、しし座のズブラ駅。お降りの方は……」

車内にアナウンスが聞こえて、博士はおもむろに立ち上がった。

そして、わたしの顔を見つめると、

「よい旅を……」

と言った。

やがて、列車はしし座のズブラ駅に到着する。透き通ったプリズムの小さな駅だったけれど、そこで博士を待っていたのは、博士と同じ顔をした男の人だった。博士は、乗降口のタラップを駆け下りながら、「やあ、私。待たせたね」と言った。きっと博士は、ようやく自分という答えに辿り着いたのだろう。それは、わたしの勝手な想像だけど、列車がホームを離れるまで、わたしは銀色の切れを握り締めて、博士たちの姿を眺めていた。

第五話 宇宙飛行士のタマゴ

赤経十一度。赤緯プラス十五度。しし座の前足、ズブラ駅を出発したカシオペア・レールウェイは、降る、雨のような流星群の中を駆け抜けていく。しし座には、いくつもの銀河の海岸が見えた。わたしは、博士にもらった宇宙服の切れ端をポケットに仕舞いこんでしばらくの間、その美しい風景を眺めていた。列車の中は静かだったけれど、その幻想的に星が重なり合う風景を見つめているだけで、退屈することはなかった。

しばらく経って、前の車両から誰かがやってくる。その刹那だけ、わたしはお婆さんや博士のことを思い浮かべたけれど、それは、ちよつとおかしな恰好をした、女の人だった。

「隣、いいかしら」

女の方は、優しそうな笑顔を浮かべて、わたしに尋ねた。わたしは小さな声で「はい」と答えた。女の方は、すこし窮屈そうに足をのけぞらせて、ブルーの瞳の男の子が、お婆さんが、博士が座っていた、わたしの向かいの席に腰を下ろした。

「すっかり乗客も減ってしまつて、話し相手が欲しかったの」

見れば見るほど、不思議な恰好をしてる。ほっそりとした女の方の顔には似合わない、ぶかぶかの銀色の服。いくつもの金具が取り付けられていて胸の辺りには、外国の国旗が縫い付けてある。そして、グローブもブーツも銀色。でも、特に不思議なのは、金魚鉢をさかさまにしたような、ガラスのボールを持っていることだ。

「ああ、わたしはコスモノート……宇宙飛行士なのよ。だから、こんな恰好しているの」

わたしの思っていることは、すぐに顔に出てしまうみたい。宇宙飛行士のお姉さんは、そう言つと、ガラスのボールと思つていたヘルメットを被つて、そのガラス越しに、また優しそうな微笑をわたしにくれた。

「と言っても、その『タマゴ』なんだけどね」

くすり、として宇宙飛行士のお姉さんは再びヘルメットを脱いで、傍らに置いた。

「切符以外に何も持たないで、カシオペア・レールウェイに乗ってしまったから、これを脱ぎ捨ててしまったら、わたしはわたしではなくなくなってしまふんじゃないかって、思うの。それに……わたしにとっては、あなたが着ている制服と同じようなものだし、脱いでしまつと、寒いからちようどいいのかもしれないわね」

聞いてもいないのに、宇宙飛行士のお姉さんはぺらぺらといろんなことを口にする。わたしは、少しでも戸惑いながらも、何も言わないで、宇宙飛行士のお姉さんの話をずっと聞いていた。

宇宙飛行士なんて、わたしにとっては、雲の上の職業だ。頭が良くて、体力があつて、何事にもくじけない強い精神力と、仲間を想う協調性に優れた人たちの、ほんの一握りしかなることが出来ない職業だった。もっとも、お姉さんの言葉を借りるなら、お姉さんは「宇宙飛行士」ではなくて、「宇宙飛行士のタマゴ」ということになる。

「あなたぐらいの年頃の青春時代も棒に振つて、ひたすら勉強したわ。聞いてよ！　こう見えても、わたし、クラスでは『ガリ勉のガリ子』なんて呼ばれたんだから。失礼しちゃうわよね？　でも……ずっと、宇宙飛行士になるのが夢だった。幼いころにね、父に怒られながら夜更かしして見上げた天体観測が、わたしの出発点なの。今でも忘れられない。夜空に輝く、満天の星。手を伸ばせば、簡単に届くんじゃないかって思った。まあ、実際は簡単には届いたりしなかったわけだけど」

思い出を語る、宇宙飛行士のお姉さんの瞳はキラキラと輝いていた。まるで、それは明るい未来に洋々と歩き出す、同級生たちを思い出させて、わたしは胸が苦しくなった。あの、気持ち悪くなるような感覚。

「でも、宇宙飛行士になれば、ロケットで星のそばまで行ける。い

つか、その夢はかなうって信じていた。信じることは力なりって、よく言うじゃない？ だから、厳しい訓練も楽しかったわ」

話を聞きながら、わたしは宇宙飛行士のお姉さんが、わたしとはまったく違う世界にいる人だと言うことを、思い知らされた。

夢も希望もない。そういうものを無価値だとは思ったりしないけれど、わたしには何が出来て、何がしたいのか分からないまま、生きてきた。理想はあっても、現実のわたしは、どこまでもちっぽけで、下らない人間だと言うことを、自分が一番よく知っている。だから、一步も踏み出せないまま、立ち止まってしまった。諦めと言うラインを自分で引きながら。

そうやって空虚な時間をすごしてきたわたしと、夢に向かって、満たされた時間を精一杯走り抜けることが出来る人は、同じ人間でも、まったく別種の生き物なんだと思う。

だから、宇宙飛行士のお姉さんの話を聞くたび、その一言一言が、わたしを惨めにさせる。いつそのまま、小さくなって消えてしまえばいいのにと、体を強張らせていると、不意に、宇宙飛行士のお姉さんは、話を途切れさせた。そして、少しだけ声のトーンを落として、

「あなたは、静かな子なのね」

と言った。わたしは、何も答えることが出来ず、黙って自分の足元を見つめた。

「迷惑だったかしら？」

「い、いえ、そんなことはありません……。その、わたし、あんまりお喋りが上手じゃなくて」

わたしは泣きたくなくなってきた。どんどん、惨めさに拍車がかかって、自分って何なんだろうって思う。博士のように、自分を客観的に研究したり出来ない、それが怖いと思うわたしにとって、わたしは惨めな生き物だった。

宇宙飛行士のお姉さんは、立ち去ると思っていた。こんなわたしとお話したって面白くもないし、なんだか薄気味悪いだけだ。だか

ら、別の席へ行ってしまうと思った。

「ただ、宇宙飛行士のお姉さんは、わたしの向かいに座ったまま、少しだけふうつ、と息を漏らして、窓の外に視線を映した。ちよつとだけ、気まずい雰囲気がわたしと宇宙飛行士のお姉さんの間に流れたような気がした。」

「わたし、昔からうるさいってよく言われるのよね。お前は、口から生まれてきたんだって。わたしもそうじゃないのかなって、思ってたことがあるわ」

宇宙飛行士のお姉さんはなんだか冗談めかしてそう言うと、気まずい雰囲気払いのけるように、窓の外を指差した。

「だけど、そんなに塞ぎこんでいて、楽しい？ 下ばかり見えても何もないでしょう？ ほら、見て。あれは、M65とM66の双子星雲の海岸よ。しし座流星群がたくさん流れる今の季節は、星捕りが星くずを集めているはず」

しし座にある銀河のなかでも一際、雲のようにたくさんの星がきらめく、二つの海岸。そのほとりに、山高帽を被った人影が見えた。それが、星捕りと呼ばれる人らしい。星捕りは、シリウスの伴星で働く犬と同じく、扁平な顔立ちと、長い髭、つんとした耳は、猫のそれにそっくりな人影は、まるで魚を取るかのように、海岸に流れてくる流星を、投網で集めていく。

ひと度、星捕りが網を投げると、たくさんの流れ星が網にすくわれていった。その拍子に、しゅるりと糸のような光が、網の隙間からまっっていく。

「あの糸みたいな残光を、星くずの絹と呼んでいるのよ。星くず自体は、アルギエバの工場に運ばれて、星の砂糖になるの。そして、残ったカスは、もう一度星の海に返される。それがいつか新しい流星に生まれ変わるって言われているわ」

星捕りの様子を眺めながら、宇宙飛行士のお姉さんは「生まれ変わる、なんて、素敵だと思わない？」とわたしに同調を求めた。わたしは、「そうですね」とたった五文字の答えを返したけれど、心

の奥で「素敵だなんて思わない」と答えていた。

生まれ変わったっていいことなんか何も無い。たとえ、生まれ変わって、たとえば猫とか犬とか、人間以外の魂になっても、何もいいことなんてあるわけ無い。結局は、社会という枠組みの中で、他の誰かと関わり合いながら生きていかなければならない。

生きると言うことは、苦しみと同じ。昔々、どこかの国の王子さまが言った言葉。わたしは信心深くないから、彼の言葉は心に響かないけれど、それでも、生きることが苦しみだと言うことだけは、共感できるような気がする。

でも、その苦しみから解放されることはない。いつまでも、自分に進歩の価値がないと、見切りをつけた時点で、その方法を二度と手に入れることは出来なくなってしまう。自分で自分の首を絞めて、苦しんで、立ち止まる。その繰り返し先に、生まれ変わったとしても、わたしはまた同じ道をひた走るだけだと思う。

わたしは、宇宙飛行士のお姉さんのように、明るい未来を歩む人にはなれない。わたしはわたしだって、分かっているから……。

宇宙飛行士のお姉さんはわたしの内心を感じ取ったのか少し悲しそう顔をする。わたしは何も答えられず、じっと、双子星雲の海岸を見つめていた。

「おおーい！」

星捕りが、カシオペア・レールウェイに気づき、仕事の手を休めて、わたしたちに手を振る。猫の手だから、開いているのか閉じているのかよく分からないけれど、その顔はにつこりと笑っていた。宇宙飛行士のお姉さんは、窓から顔をだすと、金色の髪を風になびかせながら、「おおーい！」と手を振り替えた。

そして、わたしの手を引っ張り、「君も、手を振り返しなよ。星捕りに失礼だよ」と言った。わたしはおずおずと、手を振る。すると、星捕りはわたしの事にも気づいてくれて、「よい旅を」とにこやかに手を振った。

「宇宙へは、独りじゃ行けないの。たしかに、一人乗りのロケット

もあつたけれど、それでも、地球には大勢の仲間がいた。宇宙ではね、たくさんの仲間と一緒になの。一人が困れば、みんなが一丸となつて助ける。そのとき、わたしが困っている立場なのか、それともあなたが困っている立場なのか、それは分からない。だけど、予想も出来ない危険と隣り合わせの宇宙では、手を取り合うしか、生きていく方法がない。今のあなたみたいに、誰とも関わり合いを持ちたくない、なんて思っていたら、宇宙へは行けない」

星捕りの姿が小さくなると、宇宙飛行士のお姉さんはわたしの方に向いていった。それは、大人がお説教をするみたいな口ぶりで、わたしは耳をふさぎたくなって、また俯いた。

列車はいつのまにか、しし座を離れて、おとめ座の中を走っていた。だけど、わたしは車窓から見えるおとめ座の景色なんて見ようとせず、心の中で「わたしは宇宙なんか行かない」とヒネクレた反論を口にしていた。

「いつか、人は一人ぼっちになる日が来る。でもそれまでの長い人生を、一人で生きていくことは難しい。それは、宇宙に行くとか行かないとか、そういうことではなくて、もっと現実的なこと。あなたが、他人を見て怖いと思う。話しかけようと思ったらずがすぐむだけど、その人はあなたが思うほど、あなたのことを気にしていない。怖いと思う心を振り切って、話しかければ、その人と親しくなれるかもしれないという希望を持って、一步を踏み出すことが、勇気じゃないのかな？」

「そうですね」

わたしはまた、適当な返事を返してしまう。分からないんだ。明るい未来を歩める人には、それが出来ないわたしのような人間の、下らなさしか目に映らないんだ。だから、わたしが怖いと思うことも、泣きたくなる気持ちも、分かりっこない。

「そうやって、心に鍵をいくつかかけてきた？ もうこの先は、そんなものが必要なの？」

宇宙飛行士のお姉さんが、すこしだけ強い口調でそう言った瞬間

だった。列車が急にぐんつと、前のめりになる。聞こえてくるわけじゃないけれど、座席から伝わってくる振動で、カシオペア・レールウェイがブレーキをかけているのだと分かった。

「大丈夫？」

宇宙飛行士のお姉さんが、わたしに尋ねた。わたしは頷いたが、座席の肘掛を必死に持っているのがやっとだった。

「大変、大変、大変だわ！」

乱暴に受け放たれた前の車両の通路から、誰かが足音を立てて走ってくる。それは、シリウス駅で切符の検札をしていた、女の子の車掌さんだった。

「どうかしたの？　トラブル！？」

車掌さんがわたしたちの脇をすり抜けようとした時、宇宙飛行士のお姉さんが、車掌さん呼び止めた。車掌さんは、真つ青な顔で、「お客様は席を立たないで！　どうしたもこうしたもないわ！　この先にある、おとめ座の『スピカ』は知っているわよね？」

と問いかけた。宇宙飛行士のお姉さんは「ええ、もちろん」と答えた。

「スピカには、路線連結の切り替えポイントがあるのよ。それが、切り替えポイントの係が、居眠りしちゃってて、このままじゃ、春の大曲線に入ってしまうわ！　一大事よっ」

それがどうして一大事になるのか、いまいちわたしには分からなかった。すると、車掌さんは説明するのが面倒だ、とわたしをにらみつけて、そのまま走り去ってしまう。そんな車掌さんに代わって、宇宙飛行士のお姉さんは、車窓から遠くに見える、スピカを見つめて、わたしに説明をしてくれた。

「カシオペア・レールウェイが次に目指すのは、ヘラクレス座のコルネフォロス駅。わたしが降りる駅もそこなんだけど、このままだと春の大曲線に乗って、うしかい座のアルクトゥールスへ行ってしまうわ。その先にあるのは……」

あるのは？　わたしが小首を傾げると、宇宙飛行士のお姉さんは

神妙な顔つきで、
「おおぐま座よ」
と言った。

第六話 わたしとわたし

わたしは始発の「おおぐま座のドウーベ駅」からカシオペア・レールウェイに乗車した。つまり、このままスピカの切り替えポイントで、春の大曲線に乗ってしまつと、出発地点に戻つてしまうのだ。レールのない、星の海なのに、どうしてそんなことになるのかは、よく分からなかった。

わたしと宇宙飛行士のお姉さんは、窓から身を乗り出すようにして、スピカの方角を見つめた。ここからではよく分からなかったけれど、連結ポイントと呼ばれる場所には、プリズムで出来たレバーがあつて、それを引けば、路線が変わるようになっていた。ところが、そのレバーを背もたれにして、女の人がすやすやと寝息を立てている。どうやら、その女の人が、切り替えポイントの係の人みたい。列車がぐんぐん近づいても、彼女は、目を覚まさない。

すると、ぱたぱたと車掌さんの足音が、わたしたちのところに戻ってくる。そして「ちゃんと、席に座るように言つたでしょ？」と、めくじらを立てながらも、車掌さんは宇宙飛行士のお姉さんを指差した。

「あの、あなた！ あなたのその服は宇宙飛行士の服でしょ？ お願ひ。切り替えポイントに行つて、居眠り女神を起こしてきて欲しいの」

車掌さんがそう言うと、宇宙飛行士のお姉さんは驚いた顔をした。「わたしが？ だけど、わたしはまだタマゴで……」

「タマゴでも何でも構わないから、列車をおおぐま座に戻すわけには行かない。それは、銀河鉄道の決まりなのよ。あなただって知っているでしょう？」

懇願というよりは、どちらかと言えば命令のように、車掌さんは宇宙飛行士のお姉さんに言う。だけど、お姉さんは首を立てに振らなかった。たしかに、それじゃ貧乏くじと一緒に。わたしがそう思

つたけれど、お姉さんが首を縦に振らなかった理由は違った。

「それでも無理よ。この宇宙服、ここに穴が開いているの」

宇宙飛行士のお姉さんはそういうと、くるりと身をひねって、わき腹の辺りを車掌さんに見せた。宇宙飛行士のお姉さんが言うとおりの、宇宙服に小さな綻びが見える。わたしは、その綻びを見つめ、あることを思い出した。

それは、博士にもらった銀色のつるつるした布切れ。博士は、それを宇宙服の切れ端だと言った。宇宙飛行士のお姉さんが着ている宇宙服のものとは違ってみただけで、それがあれば、綻びをふさいでしまうことが出来る。

だけど、わたしはポケットの中に入れた銀色の切れを取り出すことが出来なかった。宇宙飛行士のお姉さんがどう思っていて、それを渡せば、間違いなく宇宙飛行士のお姉さんは、貧乏くじを引くことになってしまう。それに、車掌さんはわたしに何も求めていない。だから、お姉さんが気づいていなければ、わたしがそれを出す必要はないと思った。知らないフリをしようと思った。

「ねえ、そのポケットにあるもの、出して」

突然、宇宙飛行士のお姉さんがわたしの方を向く。わたしはドキリとしてしまった。また、顔に出ていたのだろうか。それとも、わたしの様子がおかしいことに気づいたのだろうか。いずれにしても、宇宙飛行士のお姉さんは、有無を言わさない瞳でわたしを見つめた。わたしは、視線を泳がせながら、ポケットから銀色の切れを取り出した。

「でも、カシオペア・レールウェイを降りたら、二度と銀河鉄道には乗ることが出来ないっていう決まりなんですよ？　ここで降りたら、お姉さんは旅の理由を果たせなくなってしまいます」

「旅の理由か……それは残念だね。でも、ここでわたしが降りなかつたら、あなたはいて座に行くことが出来ない」

と言うと、宇宙飛行士のお姉さんはわたしの手から、銀色の切れをむしり取って、それをぺたぺたと宇宙服のほころびに貼り付けた。

「それにね、わたし、星を眺めて暮らすのは夢だった。ここで降りれば、見飽きるほど星を見ていられる。でも、あなたはずっと下を向いている。この先も下を向いたら、夜空の星は見えない。だから、あなたは、いて座へ行かなくちゃいけないのよ」

につこり。別れ際に、皆が見せてくれるその笑顔を、宇宙飛行士のお姉さんも、わたしに見せてくれた。わたしは、涙腺が緩むのを感じた。わたしは何もしないで、お姉さんに貧乏くじを引かせようとしている。そんなのダメだって思うなら、今すぐ、お姉さんの手を掴んで引き止めればいい。自分を犠牲にする覚悟があるなら、お姉さんより先に、窓から飛び出せばいい。居眠りする女神をたたき起こすくらい、わたしにだって出来る。それなのに、わたしは何も出来なかった。違う……何もなかった。いざそう思っても、足がすくんでしまい、何も出来ない。

宇宙飛行士のお姉さんは、金魚鉢を逆さにしたようなヘルメットを被り、車窓の窓を大きく全開にして、その淵に足をかけた。そして、ちらりとこちらに振り向く。

「よい旅を」

ガラス越しに唇がそう動いたように見えた。次の瞬間には、お姉さんは窓の外に飛び出していた。列車よりも速い速度で、でもふわふわと宇宙遊泳でもするかのように、切り替えポイントのスピカへと向かう。そしてまもなく、宇宙飛行士のお姉さんは、居眠り女神を起こした。

半分寝ぼけたような顔だった女神は、カシオペア・レールウェイが近づいていることを知り、目を丸くして、リズムで出来た切り替えレバーを引いた。その途端に、わたしの乗る列車は、ぐんつと左に引つ張られる。

カシオペア・レールウェイが、春の大曲線から反れて、ヘラクレス座への路線に入った。

わたしは、女神の傍で手を振る宇宙飛行士のお姉さんは、明るい笑顔でカシオペア・レールウェイとわたしを見送った。車窓から、

その笑顔を見つめたわたしの目に涙が、ぼろぼろと溢れてくる。他人のために泣くなんて、そんなこと今まで一度もなかった。なのに、どうしてこんなに悲しくて、涙が溢れてくるのか、わたしには分かなかった。分からないことだらけ。そんなのが、みんな嫌で仕方がなかった。

いつの間にか、列車は平穩を取り戻し、車掌さんの姿は再び前の車両へと消えていった。車掌さんにとって、宇宙飛行士のお姉さんが永遠に旅の目的地へ辿り着けなくなってしまったことも、わたしが泣いていることも、全部他人事なのかもしれない。それを冷たいと思っても、わたしも他人事だと思っている。結局、わたしはみじめなんだ。

へびつかい座を横切り、ヘラクレス座が目前に迫ってきてても、わたしは、座席に座って一人で泣いていた。星くずの絹のハンカチで、涙を拭うこともせず、スカートに落ちる涙をじっと見つめながら、泣いていた。

「あんたは、自分さえよければ、それでいいと思っている」

向かいの席に座る、もう一人のわたしが、わたしを睨み付ける。そのことばに違うとはいえない。

「言葉が足りない所為にして、相手に伝えることを怖いから、何もなかったフリをする。そうやって、自分の首を絞めて、どこまでも暗闇の底に落ちていく。分かっているのに出来ない。でも、それを他人は理解してくれない。あなたが、堂々巡りをしている間に、時間だけが過ぎていく」

もう一人のわたしは、わたしが何も言わないのをいいことに、説教じみた声で、わたしをなじった。

「積極性が足りない。協調性が足りない。何度も言われてきたことよね。でも、直そうとしなかった。そのことに価値を見出せなかった。わたしはわたしのままでいいんだって、変な勘違いをした。だから、友達もいない。未来も描けない。一人ぼっちでいることに、

追い詰められて苦しむことが、あなたの喜びだった」

もつと積極的になればいいんじゃない？ もつとみんなと一緒にやろうつて、声をかけたらいいんじゃない？ 何になりたいの？ 何がしたいの？ いつもお父さんとお母さんがわたしに言った。だけど、わたしは逃げるようにしてきた。そうして、追い詰められていることを実感して、自分は生きていると確かめられる。その代わり、心はどんどん重たくなっていき、未来と現実をみんなと同じように歩けなくなっていった。

一日中誰とも口をきかなくても、生きてこれた。未来を想像できなくても、生きてこれた。だけど、この先も同じようでは進めないことは分かっている。大人になって、未来になって、心から信頼できる友達もいない、心から生きていく未来もない。そういつた寂しい未来が来ることが、分かっているのに、どうしてちゃんとできないのか。

それは、わたしが莫迦だから……じゃない。わたしに勇気がないから。苦しみを味わえば、その分だけ幸せが待っている。希望めいたそんな言葉も嫌い。希望なんてどこにもなくて、苦しみは永遠に続く。だけど、苦しみと幸せの中間あたりで、生ぬるい日々を送っていけば、それはとても楽しいことだった。

「人が怖い。話すのが怖い。そう言つて、避けていたのは、結局苦しみを味わうことが怖かったから。あなたは、とても弱い人間。そんな人間をだれが気に留めてくれると思うの？ みんなは、一生懸命生きてる。涙だつて、ちゃんと流してる。他人の未来が明るいと羨んで、自分の未来をちゃんと見ようとしなのは、ただ単にあなたに弱いから」

本当の意味で、弱虫で泣き虫なわたしは、誰にも触れられない。他人に自分がどんな風に見られるのか気にして、人が怖くなり、話すのが苦手になって、うじうじと思い悩む。

「そうして、カシオペア・レールウェイに乗っかってはまだ、他人に迷惑をかけ続ける。弱い『わたし』は！」

もう一人のわたしの叱責は、わたしの心を貫いていった。何も聞きたくない、聞こえたくない。両手で耳を塞いで、わたしは座席の上につくまった。もっともっと、小さくなって、ここにもわたしと言う存在がなくなってしまうといい。

「そう思うなら、あなたは何のために生まれてきたの？ 何のために生きてきたの？」

それは、わたしが問いかけたい。わたしは何のために生まれてきたのかな。

人と話すのが苦手。人とあわせるのが苦手。おおそ社会の中で、ちゃんと生きて行けないわたしは、どうして生まれてきたんだろう。そして、何のために、わたしは生きてきたのだろう。分からない。分からないから不安になって、怖くて立ち止まる。生まれてこなきゃ良かった。

だったら、そんなわたしなんか、最初からなかったことになればいい……。

わたしはそんなことを願いながら、ただじつとうずくまって泣いた。いつの間にか、宇宙飛行士のお姉さんのために流した涙は、わたしのために流れていた。だけど、どれだけ泣いても、涙はかれなくて、気が付くとわたしは眠っていた。

長い長い眠り。もしかすると、もうひとりのわたしが現れたのも全部夢だったのかもしれない、とわたしは思った。

「おはよう」

眠りから目覚めたのは、こと座のベガを横目に通り過ぎる頃だった。声がした。目を開けると、いつの間にか、向かいの席に見知らぬ制服姿の男の子が座っていた。わたしと同年くらい。すこし丸顔だけど、瞳はとても優しそうだった。

「これを渡そうと思ったんだけど、君がぐっすり眠っているから、起こしちゃ悪いと思って。そうしたら、俺も居眠りしてしまった」

男の子はそう言うと、手の中の切符をわたしに差し出した。それ

は、「おおぐま座↓いて座」と記された、わたしの切符だった。多分、宇宙服の切れ端を取り出すときに落としてしまったんだと思う。「でも、君より早く起きたんだ。だって、もうすぐ、こと座のベガ。その後、はくちよう座のデネブを通り過ぎたら、トンネルをくぐって、天の川を南へ。そこで君の旅は終わってしまうから。その前に、その涙をふかなくちゃね」

口調はおっとりとしていたけれど、訳知り顔はわたしの涙の跡も見つけていたらしい。わたしは慌てて、ポケットからハンカチを取り出した。ブルーの瞳の男の子にもらった、星くずの絹のハンカチ。「俺は、アキラ」

「アキラさん……？」

鼻をすすって、わたしが問い返すと、アキラさんは、ちょっと笑って「アキラって呼んでよ。腕振り合うのも、なんとかかんとかって言うでしょ？」と言った。成績の悪いわたしでも、「袖振り合うのも多少の縁」という言葉くらい知っている。

わたしは、なんだかつかみ所のないおかしな男の子を、アキラと呼び捨てにすることにした。男の子の名前を呼び捨てにするのは、初めてだった。そもそも、男の子と顔を向かい合わせて、お話しするのも初めてだった。だけど、アキラはどこか、そんなものを感じさせない雰囲気があった。

その雰囲気は、わたしにアキラが、また対極の人種であることを悟らせてくれた。

だけど、アキラは宇宙飛行士のお姉さんとは違い、好きなことをぺらぺらと喋ったりしない。ただ、穏やかな春の風のように、ニコニコとしながら、わたしと一緒に窓の外を見つめていた。

輝く星の海。その不思議な光景を、アキラはどんな風に思いながら見つめているのか。いすれにしても、嫌な沈黙じゃないことだけは確かで、わたしは、そんなことがつい気になってしまった。

車窓を眩い星が見える。よく見ると、それはシリウスのプリズムと同じような形をしていて、ひとつだけ違うことは、まるで灯台の

ように光がぐるぐると廻っている。その下で光の強さを調節する小さなコックを回しながら働いているのは、年老いたハゲワシだった。その星の名をわたしは知っていた。止まり木のハゲワシ……。

「ベガ」

わたしがつぶやくと、アキラはわたしのほうを向いた。

「こと座のベガは、昔は駅として使われていたんだけど、今は銀河鉄道の道しるべに使われているんだって。その名も、星の海のアーケ灯。ああして、ハゲワシが光をまわし続けているんだ。君は星が好きなの？」

アキラにそう問いかけられたわたしは、少しばかり迷ってから、頭を左右に振った。

第七話 カシオペア・レールウェイ

綺麗なものをみたら、綺麗だと思っ心は、わたしにもある。春のまだ少し冷たい風と桜の花の色。夏の透き通った青空と蝉の声。秋の少し切ない紅葉と同じ色をした夕暮れ。冬の真っ白な雪と空に輝く星。そういうものが好きで、そういうものばかり眺めていられたら、どんなに素敵なことだろうと思う。

だけど、人の生きる社会は、そんなものに目を向けてばかりいたら、すぐにおいていかれてしまう。もっと現実的で、もっと未来のことをちゃんと見据えていなければいけない。その現実的なことというのは、人とちゃんとお話できたり、思ってること、伝えたいことを、ちゃんと相手に伝えることが出来る、と言うこと。それは、ちゃんと大人になると言うこと。見た目や体だけじゃなくて、ちゃんと心が大人になると言うこと。

「風が止んだね……」

こと座のベガを通り過ぎ、カシオペア・レールウェイの窓辺からはくちよう座が見えてくる頃、アキラが言った。開け放たれた車窓からは、あの甘い匂いのする風が吹き込んでこなくなった。そういうのを、空の海の風と呼ぶらしい。

ふと、はくちよう座のほとりに、黒い靄のようなものが見えた。その中心が、風を吸い取っているのだと気づいたとき、わたしはふと「石炭袋」と言う言葉を思い出していた。

「宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』で、あの暗黒星雲を石炭袋と呼んでいるよね。俺も中学生のころに読んだよ」

アキラはそう言うと、腰を上げて窓を閉めた。

「あれは、宮沢賢治の創作だけど、あながち間違っていないんだ。暗黒星雲は、あたりの風とともに、カシオペア・レールウェイを吸い込み、天の川の対岸へとつながるトンネルになるんだ」

「それって……」

「ブラックホール。あの星雲の中心にはブラックホールがある」

指差すアキラとは違って、わたしは星の海に浮かぶ真つ黒な雲に、言い知れない不安を感じた。何もかもを吸い取ってしまう。カシオペア・レールウェイも、アキラも、わたしも……。なかったことになってしまう。

それが、どれだけ恐ろしいことなのか、言葉足らずのわたしには言い表せないけれど、ただ、墨で塗りつぶしたような真つ黒な景色に、ただ一言「死」という言葉を連想させられて、わたしは漠然とした不安を掻き立てられた。

「大丈夫。ブラックホールには出口がある。だからトンネルなんだ。それに、星が好きなら、こんなお話をしているでしょ？」

まるで、わたしの不安を顔色から読み取ったのか、それとも、アキラも不安に感じていたのか、それを振り払うように、アキラは柔らかな言葉で話しはじめた。

「昔々、天の神様の娘、織姫と、働き者の牛追いの青年、夏彦が恋に落ちた。二人は、天の神様に認められて結婚したんだけど、あまりにその生活が楽しくて、織姫は、はたを織らなくなり、夏彦は牛を追わなくなってしまった。天の神様はとても怒って、二人を川の西と東に引き裂いたんだ。二人はそれからずっと泣いて、お互いの名前を川の両側で呼び続けた。その姿が、あまりにも悲しかったため、天の神様は、一年に一度だけ、七月七日の夜に、カササギの橋を川に渡し、二人が会うことを許したんだ」

それは、わたしもよく知っている七夕のお話だった。幼稚園のころ、先生が紙芝居で教えてくれた。一年に一度しか会えないなんて、かわいそうだと思った。天の神様は、ひどい人だと思った。だけど、彼らがちゃんと働かなかつたら、たくさんの人たちが困る。だから神様は怒ったんじゃないかと、気づいたのは、アキラがその話をしてくれたからだった。

「織姫星は、こと座のベガのこと。夏彦星は、わし座アルタイルのこと。そして、その真ん中に横たわる、はくちよう座は……」

「カササギの橋」

わたしが答えると、アキラは頷いて、でもちよつとだけ悪戯っぽく笑うと、

「やっぱり、君は星が好きなんだね。嘘は苦手なんだって、顔に書いてある」

と、わたしに言った。

「だから、暗黒星雲を抜けた向こうには、わし座があつて、その先に君の目指す、いて座があるんだ。何も、ひどいことはない」

アキラの言葉にわたしは、こくんと頷いた。

列車は、がたんがたん揺れながら、少しずつ石炭袋に近づいていく。わたしはその刻一刻をじっと待ち続けた。だけど不思議と、アキラの横顔を見ていると、少しだけ落ち着くような気がした。誰もが、あのブルーの瞳の男の子のように、金平糖のお婆さんのように、博士のように、宇宙飛行士のお姉さんのように、アキラのように……わたしの顔色だけで、わたしの思いが分かってくれたら、とても素敵だと思う。たけど、わたしは相手の顔をみただけで、彼が何を考えているのか、分からない。

そんな彼を見て、安心するだとか、それはわたしの勝手な思いで、それがアキラに伝われば、彼はわたしのことを気持ち悪いと思うかもしれない。それをわたしは恐れた。

カシオペア・レールウェイが石炭袋に入ると、車両は強く揺さぶられたけれど、すぐにその揺れは収まり、その代わりに、耳に痛いほど静かになった。窓の外は、何も見えない漆黒の闇。それは、わたしが出発した、おおぐま座のドゥーベ駅によく似ていた。

「黒いものは悲しみに似てる。誰かがそんなことを言ってた。でも、暗闇は始まりの場所。いつか人は、暗闇に戻り、再び暗闇から出発するんだ」

アキラが何を言っているのか、わたしにはよく分からなかった。

「でも、君は暗闇が怖いと思っている。俺も暗闇が怖い。だって、その先に何かがあるのか分からないから。十年後、二十年後、そのも

つと先に、自分はどんな風になっっているのか、どんな風に生きていくのか。それが分からないから、暗闇が怖いと思う。そうでしょ？」わたしは、アキラの問いかけに答えなかった。答えずにただじつとして、窓の外を見つめた。アキラもわたしに聞こえないように、溜息を吐くと、窓辺に頬杖をついて、外を眺めた。

沈黙が走るのは、もうこれで何度目か。今度の沈黙は、今迄で一番ギクシャクしているような気がした。外は、光のない世界。墨で何度も塗りつぶしたような真っ黒け。その真っ黒けは、何もかもを吸い込んでけしてしまいそうに見えた。

もしも、今この窓を開ければ、真っ黒けはそのすべてを吸い込んでしまうのだろうか。わたしは、薄ぼんやりとしたランプの明かりに反射して、ガラスに映る自分の顔を見つめながら思った。とても情けない顔。頼りない顔。惨めな顔。それを、この暗闇は吸い取ってくれるだろうか。

そう思いながらも、わたしはじつとして、窓を開けることはなかった。それっぽっちのどうでもいいような勇氣すら、わたしにはなかった。わたしは、心が重くて、弱い。

「だから、そうやって踏み出さない。どこに行っても、ずっと立ち止まっただけ」

不意に、声がした。窓ガラスに、もう一人のわたしが映る。もう一人のわたしは、わたしの隣に座って、強く睨み付けてきた。

「怖いもんね。人と話して失敗するのが。人に冷たい目で見られるのが。だから、そうやって、逃げ出すの。何も無い安穩とした時間をすごして、ただ時が過ぎるのを待ち続けるの。それを願ったんでしょ？」

もう一人のわたしはペラペラと喋るけれど、向かいに座るアキラは、もうひとりのわたしに気づくことなく、ぼんやりとしていた。「人が怖い。人と話すのが怖い。心が傷つくのが怖い。プライドを傷つけられるのが怖い。そんな自分が大嫌い。だから、いっぱい、いっぱい心に鍵をかけてきた。いろんなことを思い出さないように

してきた。あなたは、また、心に鍵をかけるの？ この先にそんなもの必要なの？」

その言葉は、宇宙飛行士のお姉さんが言った言葉にそっくりだった。

「だって、この先にそんなもの必要ないって分かってるのは、あなた自身じゃない。そうでしょ？ そのために、カシオペア・レールウェイで旅をしてきたんだから」

もう一人のわたしはそう言うのと、悪戯っぽく笑った。わたしはその笑みに引きつった。

「願ったのよね。社会になじめずに、心に鍵をかけ続け、どんどん重たくなってしまふ。そんな自分がちゃんと大人になれるのか分からなくて、このまま大人にならずに、時間がとまってしまえばいいって願ったのよね。そして、あなたは、あの朝、駅のホームで、時間を止める方法を思いついた」

「やめてっ、聞きたくない！」

わたしは両耳を押さえて、いやいやをするように頭を振った。だけど、もう一人のわたしはお構いなしに続ける。

「キラキラした明るい未来に進む人たちを羨んで、ぼんやりと電光掲示板を見つめてたあなたは、時間を止める方法を思いついて、重たい体を引きずりながら、ふらふらとホームの淵に立ったの……」

消えろ、もう一人のわたしよ消えろ。祈るような気持ちで、わたしはうずくまった。

「独りぼっちになりたい。永遠に未来が来ない世界で、誰にも触れなくて、誰にも触れられないまま生きて生きたい。いて座に着けば、そういう世界があると思ってるの？ でもね、あなたは独りぼっちになりたいのに、独りぼっちになったら寂しくてまた怖くなる。そんな矛盾を抱えたまま、死んでしまったのよ、あなたは」

くすくす。もう独りのわたしは、かみ殺したような笑い声を立てた。

「お父さんもお母さんも、あなたを愛してくれた人は、そんな風に

あなたを育てたつもりはないって、彼らは長い悲しみに捉われつつけるのよ。それは罪。あなたは、罪を背負って、独りぼっちで永遠に來ない未来を過ごすの。天国はそんなに素晴らしい場所じゃない」

いつの間にか、わたしは泣いていた。胸の奥が気持ち悪くて、吐きそうで、わたしは小さく震えながらう「うう、うう」とうめき声を上げた。こんなみじめな姿、誰にも見られたくない。このうめき声があキラに届かなければいいのに、と思った矢先、

「どうしたの？ 大丈夫？」

アキラは、わたしのうめき声に気づき、驚いたような声をして、震えるわたしの肩を揺さぶった。心配そうな優しい声が、なおさらわたしの胸を締め付ける。

わたしが、我俣を言ったり、困らせたり、怪我をしたり、病氣になった時、お父さんもお母さんも、いつもわたしのことを心配してくれた。わたしは、そんな両親のことが大好きだったのに、そんな風に思えなくなったのはいつの頃からだろう。きっと、心が重くなり始めて、わたしは誰の優しさも、ありがたいとさえ思えなくなった仕舞ったんだ。

それは、もうひとりのわたしが言うとおり、罪だと思う。

「わたしは……わたしは、死にたくなかった。本当は、みんなと同じように笑ったり泣いたりして、生きていたかった！」

わたしは吐き出すように言った。嗚咽の所為で、ちゃんと言葉になつていたかどうか怪しいけれど、その言葉は、アキラに言ったのではなく、わたしに言った言葉だった。

「でも、出来なかった。そうなりたと思ってても、わたしは自分になりたい自分を見つけることが出来なかった。心が重くなったのも全部他人の所為にして、みんなと同じように歩くことが出来なかった。ごめんなさいっ、ごめんなさいっ！！」

ぽたぽたと落ちる涙が、灰色の金平糖になつて砕け散っていく。それは、初めて心から言った「ごめんなさい」だったのかもしれない。でも、もうその言葉が誰かに届くことはない。わたしは、あの

朝、電車に飛び込んで、死んだんだ。

「どうして、そんなこと……？」

アキラはわたしの隣に座り、悲しそうな顔でわたしの顔を覗き込んだ。

「わたし、ずっと願ってたの。独りぼっちになれる世界に行きたい。プライドも詰まらない思いも全部なくて、誰かを羨んだり、自分を嫌いになつたりしない世界に行きたいって。死ねば、そういう世界にいけると思ってたの」

それがわたしの旅の理由。その言葉は、金色のイオンになってさらさらと、窓ガラスを通り抜けて、暗闇へと吸い込まれて消えていく。わたしはその光景を見つめながら、ブルーの瞳の男の子が言っていた言葉を思い出した。

『トンネルはブラックホールで出来てる。話した言葉は、車掌さんに届く前に、シュバルツシルトに吸い込まれて消えるんだ』

「そんな世界、どこにもないよ……」

アキラは、目を伏せて静かに言った。

「君は、カシオペア・レールウェイに乗って、いろんな人と出会ったよね。大事なものを君にくれた男の子。遠い昔に罪を背負ったお婆さん。見つけるとの出来ない答えを探し続ける博士。明るく他人のために自分を投げ出せる宇宙飛行士。人は、それぞれにそれぞれの思いを持ってることを知った。辛いことや苦しいこと、楽しいことや嬉しいこと。でも、それは君には分からないかもしれない。でも、君が思っていること、感じていることも、誰にも分からない」

それでも、みんな日々の犠牲の上に、苦しみや悲しみを乗り越えて生きている。いつか、幸せになるため、努力している。と、アキラは言った。

わたしは、その努力を怠ったのだ。それは分かっている。自分の足でしっかり立つことを拒否したのはわたし自身なんだ。

「でもね、俺は君の全部を間違いだったとは言わないよ。だってそうでしょ？ 傷つくのは誰だって怖い。だから君も悩んだり苦しん

だりした。たとえ、その先に、未来を見つけることが出来なかったとしても、それを間違いだったと言ってしまったら、君は二度と一歩を踏み出せない」

「もう、踏み出す場所なんて……」

どこにもないじゃない、と言いかけたわたしの口を、アキラは言葉で塞いだ。

「あるよ。きつとある、じゃなくて、ちゃんと君も踏み出す勇氣と踏み出す場所がある。それが、いて座にあるんだ」

アキラがそう言ったその時だった。車内が激しく揺れて、天井からつるされたガラスのランプが、ガタガタと音を立てた。

「もう直、トンネルを抜けるみたいだ。窓の外を見て。世界はこんなに綺麗だってことが分かるから」

アキラに促されて、わたしは窓の外に目をやった。真つ黒だった窓の外が徐々に明るくなっていく。にわかには、ふわっ、とした不思議な感覚があつて、暗闇が一瞬で消えていく。そして、わたしは思わず目の前の光景に、声を上げてしまった。

「綺麗……」

それは、何千何万、ううん、もっと多くの星がきらめく運河のような場所。とてもまぶしいのに、目を瞑らなくても、平気だった。それらが、ゆっくりと動いていくように見えるのは、わたしたちの列車が、次の目的地を目指しているから。だけど、手を伸ばせば、星捕りのように、その星をすくいとることが出来るような気がした。星はきつと、五色の金平糖のように美しいもののように思え、涙でにじんだ瞳で、わたしは天の川銀河を見つめた。

その天の川の先に、六つの星がキラキラしている。まるで、わたしを呼んでいるかのようなうだ。そう、そこがわたしの降りる駅、いて座の南斗六星だった。

「いて座の南斗六星はね、おおぐま座の北斗七星と同じひしゃく星なんだ。でもね、北斗は死んだ魂をすくい上げるひしゃく。南斗は、生まれ変わる命を撒くひしゃくって言われてる」

わたしと同じように、窓外の天の川といて座の南斗六星を瞳に映して、アキラは言った。

「君は、いつかまた、新しい君を生きるんだ。その時、今度は勇気をだして、踏み出せばいい。それまで、少しだけ羽を休めたらいいと思う」

「新しいわたし？ でも、わたしは変わらない。ずっとわたしはわたしのまま」

「変わらなくなっただけいいんだ。人と話すのが怖くて、独りぼっちが怖くて、他人の人生や未来を羨んだって、いつか、なんどでも君は生まれ変わって、新しい勇気と一步を踏み出すことが出来るんだ。だって、そうじゃなきゃ、この世界を見て、こんなに綺麗だなんて思わない」

「わたし、勇気を出せるかな？ 一步を踏み出せるかな？」

「できる。自分のことをちよつとだけ好きになれば、自分を見つけることなんて、そんなに難しいことじゃないんだ。それが今は分かんなくても、いつか絶対分かる」

アキラの言葉は、まるで、自分に言い聞かせるようだった。思えば、アキラは何故、カシオペア・レールウェイに乗っているんだろう。それをここで聞くことは出来ない。もう、はくちょう座のトンネルは越えたんだ。

「そう、なのかな？」

「うん。そうなんだよ。今はわからなくてもいいよ。でも、もしも、その時が来たら、俺と友達になろう。そうしたら、きっと寂しくなんかないから……」

ちよつと照れくさそうに言うアキラの言葉に、わたしはちよつとだけ驚いて、でも確かに頷いた。そして、アキラはわたしの手をそつと握った。つながれた手から、本当は体温が伝わるはずもないのに、わたしの心は少しだけ温かくなるような気がした。

わたしたちは、それからしばらくの間、お互いに口をきかず、ただじつと星の海を見つめていた。それは、嫌な沈黙じゃなかった。

わたしは沈黙の中で、ずっとアキラの言葉を繰り返したどつた。いつか分かる……。その日が来て、わたしは踏み出すことが出来るだろうか。自分に自信がない。たとえ、新しいわたしに生まれ変わっても、きつとわたしは立ち止まる。

でも、アキラは「それでもいい」って言ってくれるような気がした。それだけで、不思議と心が軽くなる。

「この度は、銀河鉄道『カシオペア・レールウェイ』をご利用ありがとうございます。次は、いて座のカウス・ボレアリス駅、カウス・ボレアリス駅。お降りのお客様は忘れ物などないよう、お気をつけください」

聞きなれたアナウンスが、わたしたちの沈黙を破り、列車はゆっくりと速度を落としながら、プリズムでできたホームに停車した。アキラはわたしの手をつないだときと同じく優しく離して、「行つて」と、アキラの瞳が言っている。

「アキラは降りないの？」

「人はね、みんな降りる駅が違うんだ、俺が降りる駅は、もっとずっと先の方」

にっこりと笑うアキラに、ふと振り返り、わたしはポケットから、星の絹のハンカチを取り出して、それをアキラに手渡す。

「わたしには、多分必要ない……。ううん。少しだけ、頑張ってみる。アキラと友達になった時に恥ずかしくないように」

わたしは、初めて自分から、アキラに話しかけたような気がした。アキラは、嬉しそうに「ありがとう」と言った。

「アキラは、きつとカムパネルラだったんだね。ありがとう」

と、言うとき少しアキラは驚いてきよんとする。わたしは、そんなアキラの顔が少しだけおかしくて、ちよつとだけ笑うと、ブルーの瞳の男の子や金平糖のお婆さん、博士、宇宙飛行士のお姉さんのように、「よい旅を」と言い残し、カシオペア・レールウェイを降りた。

(おしまい)

あとがき

このたびは、拙作「カシオペア・レールウェイ」をお読み頂き、まことにありがとうございます。このような、お目汚しの作品ままで、目を通していただきましたこと、感謝しても感謝しきれないと思います。

随分前から、書きたいと思っていた小説です。自分の想いとかメッセージをすべて込めたもので、おおぐま座からいて座へと、季節の星の海を渡るというコンセプトはモチーフと差別化するためではなく、物語の推移としてあらかじめ予定していました。

本作は、タイトルだけでも、すでにモチーフが宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」であることは、明白だと思います。くれぐれも、「銀河鉄道999」ではありません。

端々に、銀河鉄道の夜へのオマージュを込めながらも、二次創作としなかったのは、本作のテーマは、「銀河鉄道の夜」となんら関係がないからです。

「銀河鉄道の夜」は、ご存知の通り、ジヨバンニがカムパネルラとともに銀河鉄道の旅を越えて、過去の自分と訣別して終わります。しかし、本作はそういう前向きな終わり方はしていません。また、「銀河鉄道の夜」には、宗教的な観念が反映された会話などが登場しますが、わたしは生来信心深くないため、そういったものには疎く、もちろん、高尚さの欠片もありません。また、天体の知識があまり豊富でないことも、お詫びいたしたいと思います。

それでも、雪宮が「わたし」の口を介して、登場人物の口を介して、読まれた方に伝えたいメッセージは、そもそも高尚さとは関係のない、もっと地べたを這ったものであり、それらをきちんと文章や会話の中に込めました。果たして、それが何であるかは、読まれ方のご想像にお任せしたほうが良いと思っています。

もしも、どのような形でも、この物語を読んだ方が、メッセージを受け取っていただけたなら、この物語を書き残した甲斐があったと思います。

本作はこれまで書いた物語と違い、アキラを除く登場人物に名前をつけていません。これは、下手に名前をつけて、物語性を強くするよりも、フィクションでありながら、メッセージを強く押し出すためにあえて選んだ方法です。もし、詰まらないと思われたなら、登場人物に、ご自由に名前を付けてあげてください。

また、アキラについては、文章的技術の面から、「同年の男の子」とすると「ブルーの瞳の男の子」と区別がつきにくくなるため、やむを得ず光明の明をとって、その名前にしています。死後の世界というキーワードと、アキラのキャラクター性から、拙作「リフレイン 第五話 鏡の国」のアキラと同じ名前なのは、ただの偶然で、関係は一切ないことを、ここに付記しておきます。

ちなみに余談ではありますが、「わたし」のキャラクターはわたし自身をモデルとして造形しました。

ひとまず、ひとつの書きたかった小説を書き上げることが出来て、ほっとしています。まだまだ、技術的には、何の進歩も見られないため、精進が必要ですが、ここを新たな起点に出来たら、素晴らしいことではないか、と思っております。

最後に今一度、本作をお読み頂き、本当にありがとうございました。また、お気に入り登録していただいた皆様も、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3176q/>

カシオペア・レールウェイ

2011年1月23日18時26分発行